

カム地域のアムドチベット語・道孚県色卡[gSerkha] 方言の音声記述

鈴木 博之

[要旨] 本稿では中国四川省甘孜藏族自治州道孚県色卡郷で話されるアムドチベット語 gSerkha 方言の音体系を提示し、その音声記述を行うことで、同方言がもつ特徴を明らかにする。この記述を通して、以下のような音体系上の特徴が指摘できる。子音については、単子音としての口蓋垂音/q^h, q/が認められる点、子音連続の組み合わせが7組存在する点、および末子音に/k/と/q/の対立が認められる点がある。母音については、広母音に/æ, a, ɐ/の対立を有する点がある。また、声調による対立を形成しない。

[キーワード] アムドチベット語 方言学 音声学 口蓋垂閉鎖音

1 はじめに

本稿は四川省甘孜 [dKar-mdzes] 藏族自治州道孚 [rTa'u] 県色卡[gSer-kha] 郷で話されるアムドチベット語 gSerkha (色卡) 方言の音体系を提示し、音声記述を行うことを通じて同方言がもつ特徴を明らかにすることを目的とする記述的研究である¹。

1.1 カム地域のアムドチベット語

アムドチベット語はチベット系諸言語 (Tibetic languages; cf. Tournadre 2014) のうち、中国青海省、甘肅省、四川省といった地域に広く分布する言語である。アムドチベット語の方言研究は、チベット言語学において比較的研究の進んだ分野であり、まとまった記述 (格桑居冕・格桑央京 2002:173-270、周毛草 2003、Haller 2004、海老原 2008、Sum-bha Don-grub Tshe-ring 2011)、歴史言語学的研究 (Cham-tshang Padma Lhun-grub 2009、王雙成 2012)、辞書 (華侃・龍博甲 1993、耿顯宗等 2007) が複数提出されているほか、研究論文は枚挙にいとまがない。

¹本来チベット言語学の枠組みによる研究においては、音体系の記述とともに、チベット語文語形式 (藏文) との対応関係を明らかにする作業が不可欠とされ (Häsler 1999 など)、筆者も以前に提出したアムドチベット語の記述 (鈴木 2004、鈴木・イエシェムツォ 2006) において実践している。本稿では前者のみを取り扱い、後者については稿を改め十分な紙数を割いて行いたい。

カム地域でもいくつかの地域の牧畜民がアムドチベット語に類する言語を話していることは、当地のチベット人をはじめ、研究者にも知られている（王雙成 2012）。筆者が現地調査において確かめえた、カム地域における自称「カム人」のアムドチベット語話者は甘孜州道孚県、康定県、理塘県に居住している。自身の母語を「アムドチベット語」と呼ぶかどうかは個人差があり、アイデンティティーに照らして「カムチベット語の方言」と主張して譲らない話者も少なくない。言語名はどうあれ、話者に共通しているのは、自らの母語が、漢語で「草地話」と呼ばれる変種に属しており、アムドの牧畜地域で通用するチベット語の話者と困難なく意思疎通が可能である、という認識である。

1.2 研究の背景

カム地域で話されるアムドチベット語については、先行研究において特別な理由が提示されることもなく、注目されていない。最近の総合的なアムドチベット語方言研究においては取り上げられることがほとんどない場合もある（Cham-tshang Padma Lhun-grub 2009）。本稿で取り上げるカム・アムドの接触地域において話されるアムドチベット語は、1950年代に行われた中国の少数民族言語一斉調査（普查）において数地点が記録され、爐霍 [Brag-'go]、道孚（実際は道孚県北部の玉科 [gYu-khog] 草原で話される変種）、所拉（未同定）があてはまる（Zhang 1996）。ただしこれらの資料は公開されておらず、瞿靄堂 (1990) などでも部分的に使用されている程度で、全体像を知ることができない。一方で王雙成 (2012) には著者自身による爐霍県宗美郷の音体系が記述されており、例語も添えられている。

カム地域のアムドチベット語はカムチベット語と連続して分布しているため、そこに必然的に言語接触の問題が生じる。このときカムチベット語諸方言の形成における接触の作用にも注意が向けられるだろう。筆者の主たる関心はそこにある。筆者が gSerkha 方言を記述する 1つの理由は、同方言の近隣に分布するカムチベット語方言の 1つ Lhagang（塔公）方言の形成に大きな関心を寄せているからである²。本稿で取り上げる gSerkha 方言が分布する地域は塔公郷北西部と連続しており、牧畜民は定住している人々を除き、相互に往来がある。Suzuki & Sonam Wangmo (2014)

²Lhagang 方言は、その話される地域の社会構造が牧畜業を主とする点から、アムドチベット語の一種であると考えられてきたところがある。しかし塔公 [Lha-sgang] 村で話される方言がカムチベット語に属することが示され、しかも同方言の発音にはアムドチベット語の特徴も認められ、方言形成にあたって重層構造を呈していることがこれまでの調査で分かってきた（Suzuki & Sonam Wangmo 2014, 2015、鈴木ほか 2015）。塔公郷の近年の社会構造の変化を参考にすれば（Sonam Wangmo 2013）、牧畜民が話すアムドチベット語の影響が甚大であることは确实視されるが、どのように影響したのかという具体的な過程を知るにはこの種のアムドチベット語方言の記述を通して分析するしかないといえる。

による分類における、塔公郷塔公村において用いられる4種の方言のうち、Yichang (依羌) 方言が gSerkha 方言と直接関連する。このため、gSerkha 方言は Lhagang 方言の形成に一定の影響を与えたアムドチベット語の1つに数えることができる。

以上のような背景とともに、記述言語学的研究の立場から見て1つの言語体系を記述すること自体1つの独立した研究であるため、未記述かつ周辺の言語にも注意が向けられていない方言に関する記述を提出することには一定の価値がある。

1.3 本稿の構成

まず2節で gSerkha 方言の音体系の一覧を提示する。ついで、母音(3節)、子音(4節)の順に具体例を挙げつつ音声記述を行う。3、4節において具体例を提示する際は、語形式を掲げるが、語が含む音節間で(疑似)最小対を形成する例を含むよう配列する。

なお、音表記は国際音声字母(IPA)で規定されるもののほか、朱曉農(2010)で明確に定義される主に中国で使用されている音声記号も含む。この方法はチベット系諸言語間での音声をめぐる記述方法を一定にするための共通する記述の枠組みとして、Tournadre & Suzuki (forthcoming) の言及する *pandialectal phonetic description* に相当する。

gSerkha 方言の言語資料は筆者が2014年2月に華侃 主編(2002)の語彙表に基づいて収集した一次資料を用いる。主たる調査協力者はドガク・タンジン[mDo-sngags bsTan-'dzin]さん(男性、20代)で、色卡郷出身である。アイデンティティーとして牧畜民であるが、生活様式について見ると、言語形成期を遊牧民としてではなく、定住民として過ごしている。このほか、遊牧民として言語形成期を過ごした複数の gSerkha 方言話者からも随時調査協力を得た。

2 gSerkha 方言の音体系一覧

まず音節構造を提示し、続いて母音、子音の順に紹介する。超分節音素は認められない³。

音節構造 音節構造は以下のように記述できる(鈴木(2005)参照)。

^cC_iGVC

³gSerkha 方言において、語もしくは音節単位の発話に現れる超分節的音特徴は、しばしば高降の音調として現れる。もちろんこの音調が固定されているわけではないが、高低によって対立する例は見いだせていない。

このうち C_i（主子音）と V（音節核の母音）が必須である。

最初頭に位置する子音^cは特定の子音に限られ、通常は主子音よりも明瞭に聞こえない（4.2 参照）。わたり音 G は/w/に限定される。よって最大の初頭子音の構造は 3 子音連続となる。音声学的には [CC_i] と記述できる最初頭子音が主子音と同様に明瞭に聞こえる事例⁴があるが、両者の間に弁別的な差異を見出すことはなく、加えて音声学的にゆれも認められるため、音節構造を表す上で表記の区別を設ける必要性は認められない。

音節核になる母音の位置には 1 音節につき 1 つの母音が出現し、母音連続は 1 音節内で認められない。

末子音もまた特定の子音に限られる（4.3 参照）。

母音 舌位置による分類では、/i, e, æ, a, ɐ, ɔ, o, u, ə/の母音が認められる。

すべての母音について、長短および鼻母音/非鼻母音の対立は認められない。

子音 音節構造の主子音位置に現れる音素の一覧は以下のようになる。

表 1：gSerkha 方言の主子音（C_i）となりうる子音一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	口蓋垂	声門
					前	後			
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		c ^h	k ^h	q ^h	
	無声無気	p	t	t		c	k	q	ʔ
	有声	b	d	d		ɟ	g		
破擦音	無声有気		ts ^h			tɕ ^h			
	無声無気		ts			tɕ			
	有声		dz			dʒ			
摩擦音	無声有気		s ^h			ɕ ^h			
	無声無気	ɸ	s	ʃ		ɕ	x	χ	h
	有声		z			ʒ	ɣ		ɦ
鼻音	有声	m	n			ɳ	ŋ		
	無声	m̥	n̥			ɳ̥	ŋ̥		
流音	有声		l	r					
	無声		l̥						
半母音	有声	w				j			

⁴詳細は鈴木 (2005) の記述を参照。

3 母音

母音は舌位置について9種類の差異が認められる以外、特に長短や鼻腔共鳴の有無による対立は認められない。

以下、開音節の場合について、語末例と語中例に分けて例をあげる。

語末例			語中例		
i	ɕ ^h a ŋi	兄弟	li p ^h oŋ	体	
e	^m ŋe	火	ʔge ʔgen	教師	
æ	s ^h oŋ mæ	櫛	ŋæ wa	鴨	
a	ŋa	魚	ŋa ts ^h o	私たち	
ɐ	s ^h ke	分け前	ŋɐ ^h dan	布団	
ɔ	tɔ	煙	nɔ k ^h a	沼	
o	ŋo	買う	t ^h o pa	額	
u	ɕsu	お香	ɕ ^h u ɣa	ビヤクシン	
ə	^m ŋə	人	zə mo	娘	

すべての母音が音節単位で最小対または疑似最小対を形成する例は認められない。上の例では/ŋ/に後続する母音が/i, e, a, ɐ, o, ə/の前で（疑似）最小対を形成している。末子音を伴う例も含めて考えると、/ŋ/は^mŋuk ^hdæŋ「サトウキビ」のように、/u/の前にも現れる。

/ɔ/は/o/と次の例で最小対を形成する：ʔgo「黄羊」- ʔgo「門」。また、/ɔ/は常に開音節で現れ、語例も少ない。上にあげていない例を以下にまとめて掲げる。

^hdzɔ「月（天体）」

t^hɔ「金槌」

hɔ「腹」

jɔ「取っ手」

末子音を伴う場合、母音との組み合わせに制限がある。詳細は 4.3 参照。

4 子音

子音は、初頭単子音、初頭子音連続に分けて具体例を挙げつつ考察する。

4.1 初頭単子音

単子音の具体例は、可能な限り2例ずつ挙げる。

4.1.1 閉鎖音・破擦音

gSerkha 方言は基本的に声門閉鎖音を除き、閉鎖音・破擦音に有気、無気、有声の3系列を有する。口蓋垂閉鎖音系列は有声音を欠いており、音声的変異としても認められない。単子音として現れる有声音は、語頭でも語中でも例が非常に少なく、特に語頭位置に現れる例は収集した資料の中には認められない。中でも有声破擦音は単子音として出現する例は認められず、前鼻音もしくは前気音を伴う場合に現れる。そり舌閉鎖音および硬口蓋閉鎖音は場合によってそれぞれ破擦音 [tʂʰ, tʂ, dʒ], [cçʰ, cç, ʃʃ] で実現する場合があるが、自由変異である。

	例語	語義	例語	語義
p ^h	p ^h a jəl	故郷	p ^h u ron	鳩
p	pal ma	蓮の花	la puk	大根
b	ɕi ba	赤ん坊	koŋ tɕ ^h e bu	値が高い
t ^h	t ^h ap	方法	^m di t ^h uk	粥
t	tar	氷	tuk	毒
d	tsan dan	梅檀	rə daq	野獣
t ^h	t ^h a t ^h a	色とりどりの	t ^h o ko	フライパン
t	t̪a ma	麦の殻	t̪uk	六
d̪	^p tɕə d̪uk	十六	^p kwa d̪in tɕ ^h e	ありがとう
c ^h	c ^h at par	区別	c ^h ot	あなた
c	caq qe coq qe	曲がった	cu ^ʰ ɕet	相談する
ʃ	^s kam za ji jə	乾物		
k ^h	k ^h a	口	k ^h u juk	カッコウ
k	kat k ^h a	がけ	kuk	曲がる
g	^h tar ga	クルミ		
q ^h	q ^h ap	針	q ^h ə	雪
q	la qa	手	qo qo	凹の
ʔ	ʔa ji	祖母	ʔo ^m dət	喉仏
ts ^h	ts ^h a tɕ ^h ə	温泉	ts ^h u	染料
ts	t̪sa re t̪sa re	めちゃくちゃの	tsoŋ	たまねぎ
dz	該当なし			
tɕ ^h	tɕ ^h ap ^ʱ k ^h æŋ	トイレ	tɕ ^h u luk	宗教
tɕ	t̪ɕa	茶	t̪ɕum	欠ける
dʒ	該当なし			

以上のうち、口蓋垂音/q^h, q/については、以下に特記しておきたい⁵。/q^h, q/が単子

⁵チベット系諸言語における口蓋垂閉鎖音の存在は、孫宏開・王賢海(1987)、黄布凡(2012)、鈴木(2007, 2010, 2013, 2014)など多くの先行研究によって指摘されている。また、gSerkha

音として現れる例は少なく、上にあげたもの以外には、次のような例しか認められない。

^h do q ^h a len 「磁石」	q ^h a mo 「苦い」
q ^h e ta 「からす」	q ^h a wa 「渋い」
^r go q ^h a 「かんぬき」	

口蓋垂閉鎖音と軟口蓋閉鎖音が音節を単位に見せる（疑似）最小対の例には、以下のようなものがあげられる。

q ^h a wa 「渋い」	- k ^h a dæq 「カタ ⁶ 」
q ^h e ta 「からす」	- k ^h e saŋ 「昨日」
qo qo 「凹の」	- ko zi 「衣服」

4.1.2 摩擦音

gSerkha 方言は歯茎・前部硬口蓋に有気、無気、有声の3系列を有し、そり舌・両唇・口蓋垂摩擦音は無声のみ、軟口蓋摩擦音・声門摩擦音は無気、有声の2系列を有する。両唇摩擦音、無声軟口蓋摩擦音、有声声門摩擦音は単子音として現れる例が非常に少ない。前部硬口蓋摩擦音/ɸ^h, ɸ, ɸ/は、ときどき前部硬口蓋から硬口蓋まで広く舌面が盛り上がる [ɸ^h, ɸ^h, ɸ^h] で実現されることがあるが、自由変異である。

単子音として現れる/ɸ/と/ɸ/はそれぞれ1例のみである。

	例語	語義	例語	語義
ɸ	ɸoŋ ^h go	尻		
s ^h	s ^h a	土	s ^h um tɕə	三十
s	k ^h e saŋ	昨日	sup kwa	裂け目
z	zam ba	橋	zoq	牛
ʃ	ʃam	かわうそ	ʃoq	命
ɕ ^h	ɕ ^h a	肉	ɕ ^h u ɣa	ヒバ
ɕ	ɕi ba	赤ん坊	mɛ ɕo	休む
ɹ	ɹa	帽子	zoq	とっておく
x	xək ^h do	睾丸	xul wo	貧しい
ɣ	ɣa	狐	ɣu xa	ふくろう

方言の分布する近隣地域のカムチベット語方言では、口蓋垂音の有無が方言特徴を考えるうえで重要な指標になっている（鈴木 (2009)、Lha-mo-skyid (2010) など）。このような背景から、本稿でも特に詳しく記述しておく。

⁶祝福の意を表すスカーフの一種。

ɣ	ɣam	靴	ɣe tsa	唐辛子
h	ha ma	両親	hu	あれ
fi	fi a ^p ta	土ねずみ		

4.1.3 共鳴音

gSerkha 方言の共鳴音は、/r/および半母音を除いて、有声・無声の2系列を有する。/r/の実際の発音は多岐にわたり、[r, ɹ, r̥] がしばしば認められる。すべて自由変異である。無声鼻音は単子音として現れる例が少ない。

	例語	語義	例語	語義
m	ma mo	めす綿羊	mo wa	占い師
m̥	m̥an ba	医者	m̥aq	脈打つ
n	na nəŋ	去年	nup tɕ ^h ə	夕食
n̥	n̥ar	伸びる	n̥a ^ɹ tɕə	牛の鼻輪
ɳ	ɳa	魚	ɳo	買う
ɳ̥	ɳ̥al	発酵する	ɳ̥eŋ	心臓
ŋ	ŋa	私 [絶対格]	ŋo ^s ta	鏡
ɲ̥	該当なし			
l	la qa	手	luk	綿羊
l̥	l̥a	神仏	l̥o	南
r	ra	山羊	ru ^w rəl	亀
w	wa ɣa	皮膚	wum ba	宝の甕
j	jar	上へ	ju xo	カラスムギ

/l/の例のうち、特定の語は [ɬ, t̪] のような自由変異をもつ⁷。

4.2 初頭子音連続

gSerkha 方言に見られる子音連続は、大きく分けて、主子音 C_i に先行する要素^Cを含むもの、わたり音 G を含むもの、およびこれら両者をともに含むものになる。このうち C_i に先行する要素は音声学的に次のように分類することができる。

1. 鼻音類（前鼻音類）

(a) 狭義の前鼻音（調音位置は主たる子音に一致）

⁷この特徴は、鈴木(2006)や Suzuki & Sonam Wangmo (2015) に記述されるように、gSerkha 方言の分布地域にほど近い地域で話される Lhagang（塔公）方言やスタウ語鮮水方言などにも認められる。

(b) 両唇鼻音 [ᵐ, ᵑ]

2. 非鼻音類

(a) 両唇閉鎖音 [p, b]

(b) 両唇継続音（摩擦音 [ɸ, β]、半母音 [w]）

(c) そり舌継続音（摩擦音 [ʃ, ʒ]、流音 [ɹ]）

(d) 軟口蓋摩擦音 [x, ɣ]

(e) 口蓋垂摩擦音 [χ, ʁ]

(f) 声門摩擦音（前気音） [h, ɦ]

以上のうち、(2c)、(2d)、(2e)の各要素は、音声学的にそれぞれ主子音と有声性が共通する前気音としても現れる。音声学的にそれぞれ有声性の共通する前気音として現れうる。このとき、前気音が現れる例を見るだけではどの子音と交替するのかは不明になるといえる。しかし一方で前気音でのみ現れる子音連続(f)も存在する。

音声学的に相補分布の関係を見せるのは、(2b)の両唇摩擦音 [ɸ] と両唇半母音 [w] で、阻害音には前者が、共鳴音には後者が現れる傾向にあるといえる。このため、最初頭子音には両者のうちのいずれかのみを認めればよいといえる。有声両唇摩擦音 [β] は主子音には現れず、[ɸ] の出現箇所は [w] で現れることが認められるため、[w] を記述に選択する。

(2d)の軟口蓋摩擦音と(2e)の口蓋垂摩擦音は、実際のところ自由変異であるため、どちらかで記述を統一できる。(2d)の音声実現が基本的に後部軟口蓋音になることを考慮し、記述の上では(2e)の口蓋垂摩擦音として統一する⁸。

以上、子音連続の最初頭子音の音特徴について述べた。この中で、(1)の鼻音類、(2a)の両唇閉鎖音類、(2f)の前気音類については、常に主子音 C_i よりも明瞭には聞こえない。それ以外については、ときどき C_i と同じように明瞭に聞こえる場合がある。特に有声音であるときは顕著であるといえる。

なお、^c と C_i の間の有声性については、基本的に一致する。ただし有声共鳴音に先行する^cは、丁寧に発音する場合、半有声化するなど、有声性が不安定になる事例が認められる。

以下、gSerkha 方言における子音連続を主子音 C_i に先行する要素によって分類して述べ、ついでわたり音 G を含むもの、3子音連続について述べる。

⁸ただし [χ] は主子音の位置に現れるが、[ʁ] は現れないという異なりがある。

4.2.1 鼻音類

鼻音類は、その鼻音要素が後続子音と同一調音位置となる狭義の前鼻音の事例と、後続子音と異なる調音位置となる両唇鼻音に分けて例を挙げる。

前鼻音

mb : mbə 虫	${}^mp^h$: ${}^mp^ha\ ra$ ジャツカル
nd : ${}^ndam\ {}^njoq$ 泥	${}^nt^h$: ${}^nt^ha\ \gamma a$ 縄
nd : ${}^ndi\ wa$ 客	${}^nt^h$: ${}^nt^hoŋ$ 生まれる
nj : ${}^njo\ roq$ お供	${}^nk^h$: ${}^nk^hor\ wa$ 輪廻
ng : ${}^nga\ zək$ いくつか	${}^nq^h$: ${}^nq^heŋ$ 凍る
ndz : ${}^ndzer\ ma$ 釘	${}^nts^h$: ${}^nts^ho\ wa$ 生活
ndz : ${}^ndzə\ ba$ ほほ	${}^ntɕ^h$: ${}^ntɕ^hoq$ ゆがんだ

両唇鼻音

md : mda 矢	mŋ : ${}^mŋa\ ru$ 甘い
mq : mqi 米	${}^mt^h$: ${}^mt^he\ mo$ 親指
mj : ${}^mjo\ \gamma a$ 速い	${}^mt^h$: ${}^mt^ha$ 細い
mg : mgo 頭	${}^mk^h$: ${}^mk^hi\ ba$ 精通した
mdz : ${}^mdzə\ \gamma ə$ 指	${}^mts^h$: ${}^mts^hi\ to$ 双子
mdz : mdzar 登る	${}^mtɕ^h$: ${}^mtɕ^ho\ s^ten$ 仏塔
mn : ${}^mna\ s^ci$ 誓う	mɲ : ${}^mɲuk\ ma$ 竹
mɲ : mɲeŋ 名前	

4.2.2 両唇閉鎖音

両唇閉鎖音は閉鎖音および破擦音に先行する。子音連続間で有声性が一致する。

pt : ptaq 結びつける	${}^ptɕ^h$: ${}^ptɕ^ha\ qa$ 肩
${}^pt^h$: ${}^pta\ {}^pt^huk$ 孤児	ptɕ : ptɕə 十
pt : ptəq 岩石	bd : ${}^bda\ r^jæq$ 知らせる
pc : ${}^p^hor\ {}^pca$ にせの	bd : bdaq 計算する
pk : ${}^pkot\ pa$ 方法	bj : bjər 翻訳する
${}^pts^h$: ${}^pta\ {}^pts^hi$ 軒	bg : bgo 分かち合う
pts : ${}^ptson\ {}^pk^hæŋ$ 監獄	bdz : bdzət 忘れる

4.2.3 両唇継続音

両唇継続音は後続子音の性質によらず現れるといえる。子音連続間で有声性が一致する。発話速度の速いときに、両唇継続音部分が前気音と交替することがある。

Φt : Φtən 適合させる	ʷd : tɕʰem ʷdəq 家族
Φt : Φtə 初乳	ʷd : ʷdæŋ 砂糖
Φq : Φqoq 抜く	ʷj : ʷjæq 酔う
Φts : Φtso ɣa 汚い	ʷg : ʷgal 渡る
Φtɕʰ : Φtɕʰə la ʳjo 出る	ʷz : ɕʰeŋ ʷzo 大工
Φtɕ : Φtɕet kʰa 春	ʷʒ : ʷʒon ma 乳牛
Φsʰ : Φsʰə 迎える	ʷn : ʱloq ʷnan 映画
Φs : Φsəl we 綿	ʷl : ʷla 太もも
Φɕ : Φɕən 雲	ʷr : ʷri 蛇
Φɕʰ : Φɕʰe ma lep tse 蝶	ʷj : ʷjar kʰa 夏
Φɕ : Φɕei ma 砂	

4.2.4 そり舌継続音

そり舌継続音は有気音と共起しない。語頭では子音連続間で有声性が一致するが、語中ではそり舌継続音が後続子音に関わらず有声音になることがある。発話速度の速いときに、そり舌継続音部分が前気音と交替することがある。

ʳt : ʳta 馬	ʳc : mʱə ʳcæŋ 单身
ʳc : ʳcæŋ 野口バ	ʳj : ʔa ʳja 兄
ʳk : ʳke 首	ʳg : ʳge ʳgen 先生
ʳq : ʳqa ʳqoŋ 窓	ʳdz : ʳdzə ma 眉毛
ʳts : ʳtsa 脈	ʳdʒ : ʳdʒi ɕʰəl 痕跡
ʳtɕ : ʳtɕe 舌	ʳɕ : mʱtɕʰə ʳɕa 胆囊
ʳm : ʳmon ba 狩人	ʳm : ma ʳmo lo toq とうもろこし
ʳn : ʳna 鼻	ʳm : sʰo ʳman 歯磨き粉
ʳɲ : ʳɲer ma しわ	ʳn : ɕʰa ʳnəq 肌
ʳŋ : ʳŋi 銀	ʳɲ : næŋ ʳɲeŋ 芯
ʳp : sʰa ʳpaq 瓦	ʳŋ : pʰeɔ ʳŋa 十五
ʳt : ta ʳta 今	ʳl : ʱba ʳlap 波
ʳd : ʳdo 石	

4.2.5 後部硬口蓋～口蓋垂摩擦音

後部硬口蓋～口蓋垂摩擦音は有気音と共起しない。語頭では子音連続間で有声音が基本的に一致するが、発話速度が遅いときには後続子音が有声音の事例について、半有聲または無聲で現れる例も見受けられる。一方、語中では後部硬口蓋～口蓋垂摩擦音が後続子音の有声性に関わらず、音声学的に有声音になることがある。発話速度の速いときに、後部硬口蓋～口蓋垂摩擦音部分が前気音と交替することがある。

$^{\text{h}}\text{p}$: $^{\text{h}}\text{pe}^{\text{m}}\text{bar}$ 松明

$^{\text{h}}\text{t}$: $^{\text{h}}\text{te ma}$ 担保

$^{\text{h}}\text{ts}$: $^{\text{h}}\text{war}^{\text{h}}\text{tsæŋ}$ 空間

$^{\text{h}}\text{tɕ}$: $^{\text{h}}\text{tɕən}$ 小便

$^{\text{h}}\text{s}$: $^{\text{h}}\text{sor}$ 錐

$^{\text{h}}\text{ɕ}$: $^{\text{h}}\text{ɕo}^{\text{h}}\text{a}$ 翼

$^{\text{h}}\text{d}$: $^{\text{h}}\text{ɕə}^{\text{h}}\text{duk}$ 傘

$^{\text{h}}\text{z}$: $^{\text{h}}\text{zar po}$ 崖の多い

$^{\text{h}}\text{ʒ}$: $^{\text{h}}\text{k}^{\text{h}}\text{a}^{\text{h}}\text{ʒi}^{\text{h}}\text{nin ka}$ さきおととい

$^{\text{h}}\text{m}$: $^{\text{h}}\text{ma}$ 低い

$^{\text{h}}\text{n}$: $^{\text{h}}\text{naŋ}^{\text{h}}\text{nin}$ あさって

$^{\text{h}}\text{ŋ}$: $^{\text{h}}\text{ŋi}$ 二

$^{\text{h}}\text{l}$: $^{\text{h}}\text{lə}$ 歌

$^{\text{h}}\text{j}$: $^{\text{h}}\text{juk}$ 振る

4.2.6 前気音

前気音は有声音に先行するものと無声無気音に先行するものが認められる。主子音が阻害音の場合、子音連続間で基本的に有声音が一致する。

主子音に先行する位置で前気音のみが現れる例は比較的少なく、前気音は上述の何らかの口腔内調音要素の変異として現れることが多い。以下の例では、調査時に前気音のみが現れるものに限って言及する。ただし、これらの例が前気音以外の音声実現をもつ可能性は否定できない。

$^{\text{h}}\text{p}$: $^{\text{h}}\text{den}^{\text{h}}\text{paŋ}^{\text{h}}\text{ɕet}$ 証明する

$^{\text{h}}\text{t}$: $^{\text{h}}\text{ter}^{\text{h}}\text{do}$ 鉱石

$^{\text{h}}\text{t}$: $^{\text{h}}\text{tə}$ かぶる

$^{\text{h}}\text{c}$: $^{\text{h}}\text{t}^{\text{h}}\text{o}^{\text{h}}\text{coq}$ とさか

$^{\text{h}}\text{k}$: $^{\text{h}}\text{kar ma}$ 星

$^{\text{h}}\text{ts}$: $^{\text{h}}\text{tsa wo}$ さび

$^{\text{h}}\text{tɕ}$: $^{\text{h}}\text{tɕæq}$ 鉄

$^{\text{h}}\text{s}$: $^{\text{h}}\text{sum}$ 三

$^{\text{h}}\text{b}$: $^{\text{h}}\text{ba}^{\text{h}}\text{lap}$ 波

$^{\text{h}}\text{d}$: $^{\text{h}}\text{de wa}$ 村

$^{\text{h}}\text{d}$: $^{\text{h}}\text{dɔ}$ 羽

$^{\text{h}}\text{j}$: $^{\text{h}}\text{jə zoq}$ 家畜

$^{\text{h}}\text{g}$: $^{\text{h}}\text{ga mo}$ 妻

$^{\text{h}}\text{dz}$: $^{\text{h}}\text{dzɔ}$ 月（天体）

$^{\text{h}}\text{dʒ}$: $^{\text{h}}\text{dʒap}$ 背

$^{\text{h}}\text{z}$: $^{\text{h}}\text{tɕæn}^{\text{h}}\text{zæn}$ 猛獣

$^{\text{h}}\text{ʒ}$: $^{\text{h}}\text{ʒə}$ 弓

$^{\text{h}}\text{m}$: $^{\text{h}}\text{ma}$ 傷

$^{\text{h}}\text{n}$: $^{\text{h}}\text{ne}$ 耳

$^{\text{h}}\text{ŋ}$: $^{\text{h}}\text{ŋiŋ}^{\text{h}}\text{ja}$ 古い

$^{\text{h}}\text{ŋ}$: $^{\text{h}}\text{ŋa}^{\text{h}}\text{p}^{\text{h}}\text{tɕə}$ 五十

$^{\text{h}}\text{l}$: $^{\text{h}}\text{lɔŋ}^{\text{h}}\text{ta}$ 運

末子音/k/と/q/は/e, ə/に後続する場合を除いては相補分布している。逆に言えば、/e, ə/では弁別されるため、それぞれの音価に基づいて表記を行う根拠があることになる。その他の末子音については、母音との組み合わせに制限があるとはいえ、互いに相補分布をなすものは認められない。また、3節でも述べたが、/ɔ/は開音節のみに現れるという点にも注目できる。

以下、末子音を閉鎖音、鼻音、流音に分けて具体例をあげる。

4.3.1 閉鎖音のもの

すべての閉鎖音の末子音は閉鎖を開放してもしなくてもよく、また、どちらかが話者の発話の癖に属するといったこともないため、完全な自由変異であると考えられる。加えて、/k/, /q/は摩擦音として現れることもあり、語中に現れる場合は基本的に摩擦音であるが、閉鎖音で発音しても話者から訂正されることはなく、方言特徴を反映する要素であると母語話者の意識の中に入らないと判断する。

/p/のもの

ɕ^heq lep 板

q^hap 針

n^ht^hop 得る

ɕ^heq tɕup 鑿

nəp 西

/t/のもの

b^hde ɕcit 幸せな

k^het なぞなぞ

ɕkat 声

ɣot 光

t^hət チーズを用いた菓子

/k/のもの

ɕ^hik しらみ

ɕtsek t^hoq 階

tuk 六

wo rək チベット族

/q/のもの

ɣɕeq 円寂

ɕjæq ヤク

ɕnaq 膿

p^heq おすぶた

ɕcoq ひしゃく

rəq 触れる

以上のうち、/ek/も/eq/も実際の例ではほとんど認められないため、/k/と/q/は実質/ə/の後に現れる場合で対立を形成する。(疑似)最小対には次のようなものがある。

rəq 「触れる」 - rək 「種類」

ts^həq 「濾す」 - ts^hək 「関節」

ʰt^həq 「身につける」 - t^hək 「雫」

4.3.2 鼻音のもの

/ŋ/については、弱化して先行母音を鼻母音化し、末子音としての音価をほとんど失う場合がある。

/m/のもの

tə zim 芳しい

ʰts^hem 縫う

r^hgam 箱

tom 熊

r^hgən m^hdum ぶどう

r^hgəm 選び出す

/n/のもの

k^he ɲin おととい

ʰkaŋ r^hdzen 裸足

ʰtɕæn ɲzæn 猛獣

ɲzan 袈裟

s^hen 種

kon 着る

w^hlun 愚かな

b^hdən 七

/ŋ/のもの

ɲiŋ ŋa 古い

t^haq reŋ 遠い

w^hræŋ 浸す

raŋ 自分

ŋeŋ pa がちょう

m^hdox ma roŋ 半農半牧

r^hduŋ すりつぶす

na nəŋ 去年

4.3.3 流音のもの

/l/については、語によって脱落することがあるが、どの語が該当するかは予測することができない。少なくとも音声学的な原因によるものではない。

/l/のもの

ɲil joŋ 居眠りする

ɕ^hel ガラス

nəq ts^hal 森

p^hkwəl よじる

p^htɕol 預ける

xul wo 貧しい

ru^wrəl 亀

/r/のもの

ʔser 金

ʔsor 錐

ho^hsar 少年

k^ha^ptsər 手綱で制御する

5 まとめ

本稿では、未記述のアムドチベット語の方言の1つである gSerkha 方言の音体系を提示し、その音声記述を行った。

音声記述を通して、以下のような特徴が指摘できる。子音については、硬口蓋閉鎖音系列が存在する点、蔵文には対応しない口蓋垂音/q^h, q/が初頭子音に現れる点、および末子音に/k/と/q/の対立が認められる点がある。また、子音連続について、第1子音要素が鼻音の場合調音位置を同じくする前鼻音と両唇鼻音の2種があり、口腔内の調音位置についても4種類が対立し、かつ前気音とも対立を形成するなど、複雑な体系をもっている。母音については、広母音に/æ, a, ɐ/の対立がある点があげられる。

gSerkha 方言は甘孜州で話されるアムドチベット語の中でも、カムチベット語と密に接触している変種の1つである。本稿の記述は同地域におけるカムチベット語とアムドチベット語の接触の具体像を明らかにするための議論に必要とされる基礎的資料となりうるだろう。

[付記]

gSerkha 方言の調査に当たっては昆明市の瑪吉阿米・香格里拉藏族風情宮の関係各位の協力を得た。ここに記して感謝の意を表する。

参考文献

- 海老原志穂 (2008) 『青海省共和県のチベット語アムド方言』 東京大学博士論文。
- 鈴木博之 (2004) 「アムドチベット語チャプチャ・チェルジェ牧民方言の音声分析」『京都大学言語学研究』第23号 145-165.
- (2005) 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第69号 1-23.
- (2006) 「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の方言特徴とその背景」『ニダバ』第35号 39-47.

- (2007) 「カムチベット語康定・新都橋 [Rangakha] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第2号 131-162.
- (2009) 〈川西地区“九香線”上の藏語方言：分布與分類〉《漢藏語學報》第3期 17-29.
- (2010) 「ヒャルチベット語松潘・大寨 [Astong] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第5号 117-155.
- (2013) 「カムチベット語塔城・格登 [sKobsteng] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第8号 123-161.
- (2014) 〈尼汝藏語的小舌輔音與其藏文對應規律〉《東方語言學》第14輯 1-12.
- 鈴木博之、四郎翁姆 [bSod-nams dBang-mo]、拉姆吉 [Lha-mo-skyid] (2015) 「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の物語『菩薩の愛する地・塔公』訳注—塔公方言の多層構造と物語の異同に関する考察を添えて—」千田俊太郎・伊藤雄馬編『地球研言語記述論集』7, 111-140.
- 鈴木博之、イエシェムツォ [Ye-shes-mtsho] (2006) 「アムドチベット語中阿壩 [rNga-wa] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第1号 59-88.
- Cham-tshang Padma Lhun-grub (2009) *A-mdo'i yul-skad-kyi sgra-gdangs-la dpyad-pa*. 青海民族出版社.
- Haller, Felix (2004) *Dialekt und Erzählungen von Themchen : Sprachwissenschaftliche Beschreibung eines Nomadendialektes aus Nord-Amdo*. VGH Wissenschaftsverlag.
- Häsler, Katrin Louise (1999) *A Grammar of the Tibetan Dege ཇེ་དགེ་ (Sde dge) Dialect*. Selbstverlag.
- Lha-mo-skyid (2010) *Mi-nyag sa-khul-gyi kha-skad-kyi khyad-chos-la rags-tsam gleng-pa*. 西北民族大學畢業論文.
- Sonam Wangmo [bSod-nams dBang-mo] (2013) *Lhagang Monastery in Myth, History and Contemporary Society*. M.Phil. Thesis, Universitetet i Oslo.
- Sum-bha Don-grub Tshe-ring (2011) *Bod-kyi yul-skad rnam-bshad*. 中国藏學出版社.
- Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2014) *Language evolution and vitality of Lhagang Tibetan, a Tibetic language as a minority in Minyang Rabgang*. Paper presented at the workshop on the linguistic minorities of the Chinese Tibetosphere (Uppsala).

- (2015) Quelques remarques linguistiques sur le tibétain de Lhagang, «l'endroit préféré par Bodhisattva». *Revue d'études tibétaines* 32, 153-175.
- Tournadre, Nicolas (2014) The Tibetic languages and their classification. In Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan Linguistics: Historical and Descriptive Linguistics of the Himalayan Area*, 105-129. Walter de Gruyter.
- Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (forthcoming) *The Tibetic Languages: An Introduction to the Family of Languages Derived from Old Tibetan* (with collaboration of Konchok Gyatsho and Xavier Becker).
- Zhang, Jichuan (1996) A Sketch of Tibetan dialectology in China: Classifications of Tibetan dialects. *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 25 (1), 115-133.
- 周毛草 [’Brug-mo-mtsho] (2003) 《瑪曲藏語研究》民族出版社.
- 耿顯宗、李俊英、龍智多傑 [Lhun-grub rDo-rje] (2007) 《安多藏語口語詞典》甘肅民族出版社.
- 華侃 主編 (2002) 《藏語安多方言詞匯》甘肅民族出版社.
- 華侃、龍博甲 [Klu-’bum-rgyal] (1993) 《安多藏語口語詞典》甘肅民族出版社.
- 黃布凡 (2012) 〈藏緬語的小舌音〉《語言學論叢》第四十五輯 157-174.
- 格桑居冕 [sKal-bzang ’Gyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002) 《藏語方言概論》民族出版社.
- 瞿靄堂 (1990) 《藏語韻母研究》青海民族出版社.
- 孫宏開、王賢海 (1987) 〈阿壩藏語語音中的幾個問題〉《民族語文》第2期 12-21.
- 王雙成 (2012) 《藏語安多方言語音研究》中西書局.
- 朱曉農 (2010) 《語音學》商務印書館.

Phonetic description of the gSerkha dialect, Amdo Tibetan spoken in the Khams region

Hiroyuki SUZUKI

Abstract

This paper presents a phonetic description of the gSerkha dialect of Amdo Tibetan, spoken in Seka Village, Daofu County, Ganzi Prefecture, Sichuan Province, China.

Seka Village is a nomadic area mainly inhabited by pastoralists, who speak a variety of Amdo Tibetan. It belongs to Khams region in the traditional Tibetan geography, and the identity of the inhabitants is also *Khams-pa* ‘Khams people.’ Varieties of Khams Tibetan are also spoken in the areas surrounding Seka Village, thus the gSerkha dialect have experienced a long-term language contact with Khams Tibetan.

Amdo Tibetan spoken in this area was officially recorded in 1950s, but the materials are not available, hence the phonological aspect of the dialect is still unknown. The description of the gSerkha dialect is necessary for an analysis of the historical development of the surrounding Khams Tibetan dialects. For this sake, the phonological system must be clarified.

The analysis shows: the existence of uvulars /q^h, q/ at the initial position and a distinction between /k/ and /q/ at the final position on the consonants; the existence of a distinction between /æ/, /a/, and /e/; no tonal contrasts.

受領日 2015年4月9日
受理日 2015年8月1日